

「神がわたしを救われた！」

(ルカによる福音書 17:11-19)

主イエス一行が通りかかったとき、十人の重い皮膚病患者が声を張り上げました。この声はもはや神への叫び、祈りです。主イエスはこの祈りに応えて「祭司たちのところへ行って、体を見せなさい」と言われました。彼らはすぐに従い、出ていき、その途中で患部が「清くされた」ことを知りました。

レビ記 13 章の規定によると、重い皮膚病にかかり、祭司から「あなたは汚れている」と言い渡された患者は、ユダヤ人の共同体から隔離され、町の外に一人で住まねばならず、歩くときも「わたしは汚れた者です。汚れた者です」と叫ばなければなりません。症状がおさまり、祭司に体を見せて「あなたは清い」と認められるまで、患者は共同体に復帰することが許されません。それゆえ主イエスは、十人の患者に「祭司たちのところへ行って、体を見せなさい」と指示したのです。おそらく、主イエスのもとに戻らなかった 9 人は、喜びのなか、家族の元へ急ぎ帰ったのでしょう。では、戻ってきた一人には何が起こったのでしょうか。

15 節「自分がいやされたのを知って」という箇所では、ルカによる福音書は意図的にそれまでの「清くされた」という表現を、「いやされた」と言い換えています。ここで、「知って」とされているのは、「見る」という単語です。たしかに、他の九人も主イエスの言葉にすぐに従いました。しかし、この一人だけが「清くされた」こと以上のことを「見た」のです。彼が「見た」ものは、清くされた患部の向こう側に働く神の憐れみの御手です。「神がわたしを救われた！」ということを見た彼は、感謝せずにはおられず、主イエスのもとに走り戻りました。いまや彼は、神と共にある命に迎え入れられたのです。

奇跡は救いの入り口でしかありません。その先にある主の御手による憐れみを見、神との交わりに迎えられるとき、救いは完成します。信仰とは、「その先」に働かれている神を見る目のことです。その目があれば、神の「わたしへの働きかけ」に気付くことができます。それゆえ主イエスは、「あなたの信仰があなたを救った。」と言われたのです。救いから遠いとされていたサマリア人が救われたように、わたしたちも信仰という目をいただき、神の御手を見、神との交わりに迎えられらるなら、賛美と感謝のうちに生きることができます。